

# 日拓ホームフライヤーズ報道を振り返る

## 日本ファイターズ誕生までの裏話

### 北海道メディア研究

道内の新聞社や出版社OB、フリージャーナリストなどで組織した団体「新聞・雑誌・テレビなど北海道を主体にしたメディアの検証を行い、健全なメディアやそこに働く人材を育成することを目的としている。」



半世紀前の1973(昭和48)年は、日本ハムファイターズが誕生した記念すべき年である。日ハムが球界に参入を果たしたのは、日拓ホームフライヤーズがわずか1シーズンで球団売却に踏み切ったためだが、日拓の西村昭孝オーナー(当時41)は、破天荒な言動で話題を提供し続けた「時の人」であった。そんなわけで、本欄でも日拓関連のネタを再三取り上げており、今回はその総集編(12月分のみ新規に収録)をお届けする。ちなみに、西村氏は日拓グループの代表取締役会長として健在である。

## 怪しげな不動産屋「西村日拓社長」

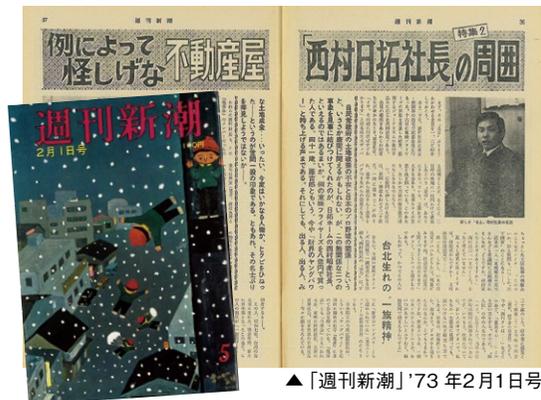
西村氏と日拓の名前が初めて週刊誌で紹介されたのは、「週刊新潮」2月1日号である。8億円もの巨費を投じ、東映フライヤーズを買収した西村氏は、世田谷の豪邸で

ド派手な記者会見を開き、新球団経営への意欲を語った。このとき、わずかに1シーズンで球団を手放すことになるとは、誰も想像していなかったに違いない。

新潮の記事は、記者会見の内容には触れず、少々意地悪な視点で西村氏の人物像に迫っている。西村氏は昭和7年、日本統治下だった台湾で生まれた。現地では会社や農園を所有し、暮らしぶりは悪くなかったのだが、戦争が一家の運命を変え

た。  
〈折から父親はニューギニアへ出征中。母親はまもなく死亡。長男の西村社長が弟たちを連れて、無一文で日本へ引き揚げることになる〉  
18歳の西村青年は家族を養うため、帰国後はバラックで小さな商いを営み、その後、安定した収入を求めて警察官になった。なかなかの敏腕警官だったようで、元同僚は「泥棒を捕まえるのは抜群にうまかった」と証言し

ている。  
天職と思えた警官生活だったが、公務員に甘んじるのは不満だったのか、まったく畑違いの不動産



▲「週刊新潮」'73年2月1日号

屋のセールスマンに転身。

よほどこの業界の水が合ったらしく、警官以上に実力を発揮し、昭和40年に日拓ホームの前身である日拓観光を設立すると、7年間で会社を資本金2億円、年商130億円にまで成長させたのだった。まさにイケイケドンドンの絶頂期であり、その自信が球団買収を決断させたのだろう。

新潮の記事は、日拓商法に対しては非常に手厳

しい。

〈那須高原とは呼べないような裾野の元開拓地を坪三百円から五百円で買い取り、それを別荘地として坪三万円から四万円ですりつける〉(会社は毎年のように新聞広告でセールスマンを募集し、一年に千人入社するが、また千人辞める。自分の親類縁者に売りつけると、もうやっていけない者が大半だからである)

れない。

「週刊新潮」5月17日号では、開幕後の日拓の意外な奮闘ぶりを伝えている。まだボロが出ている面もあったのだから、日拓関連で好意的な記事は珍しい。  
〈ゴールデンウィーク明けの日拓―太平洋四連戦(後楽園)では初日のダブル(ヘッダー)が二万八千人、二日目が三万七千人、三日目には、パ・リーグ最高の入りという四万人の観客を集めた〉

たようだ。  
〈西村オーナーが直接編成したといわれているのが、日拓ホーム・七人の侍〉である〉  
有能な営業部長が、七人の侍の中心的人物であった。西村將軍の檄が飛ばぬか、家とチケットの両方を売り捌く、二刀流の活躍で、好調な観客動員を支えたのである。しかし、実力が伴わな

ければ、ファンに飽きられるのも早い。最終的に5位と低迷(新庄日ハムよりマシではあるが)し、球団身売りへとチームが崩壊していくのだった。ちなみに、太平洋も4シーズンしか持ちこたえられず、1976年にクラウンライタライオンズとなった。新興チームの蹉跌は、球団経営の難しさを物語る。

## 日拓後任監督に金田正一説

シーズンが進むにつれ、西村氏の迷走が目立つようになってきた。「週刊現代」6月7日号では、日拓の後任監督として「金やん」こと金田正一の名前を挙げている。金田は、ロッセオリオンズの監督を務めており、常識的には考えられない人選なのだが、どんな経緯

があったのだろうか。  
〈ロッセは金やんが監督になったとたん、メチャクチャに強くなった。中村さんの太平洋は、いまや日本一の人気球団だよ。同じ新球団でも、うちだけは強くもなければ、人気も出ない。これはどういうことだ?〉  
西村氏は、側近にこう



▲「週刊新潮」'73年5月17日号

こうした原野商法は、元社員による告発本などによって次々と明るみになっていった。ただ、西村氏は怒り心頭に発する被害者を懐柔し、自社に有利な条件での示談に持ち込むのに長けていたという。ダーティーイメージがあつたものの、口舌の才があつたゆえ、球界参入を認められたのかもしれない。

対戦相手の太平洋クラウンライオンズ(西武ライオンズの前身)も新顔球団であり、フレッシュな決がファンの関心を集めたのだろう。当時は完全な「セ高パ低」であり、4万人という数字は驚きといつていい。ただ、スタンドを満員にした背景には、企業努力があつ



続きは『**月刊クオリティ**』本誌を  
ご覧ください。

▼ ご購読のお申し込みは ▼

○インターネットでのお申し込みはこちらから  
<https://qualitynet.co.jp/koudoku/>

○お電話でのお申し込みはこちらから

**TEL 011-644-0101**

(9:00 ~ 17:30 土日・祝日をのぞく)